
世話役Aの苦勞物語

佐々松 ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世話役Aの苦勞物語

【Nコード】

N8527X

【作者名】

佐々松 ミナ

【あらすじ】

天界から人間界に降り立った神の側近・世話役A。
人間界に降り立った神の奇行とは！？

・・・それによる世話役Aの苦勞をつづった物語である。

プロローグ

ここは天界——。神はもちろん、天使やら鬼やら仏やら・・・とにかくいっぱいいる。

「旅行行きたいなあー。」

その声をあげたのは、天界の主・神である。

「なに馬鹿なこと言ってるんですか。」

軽くあしらったのは、神の側近・通称世話役A。

「ええー旅行楽しいよー。」

気楽な声をあげたのは、神がこよなく愛するアンドロイド・その名もおもちゃである。

それに顔を輝かせる神。

「だよなっ！」

「神の仕事を放棄したいっていうわけですか。」

「ひねくれてんなあ。50年ほどぬけるぐらい大丈夫だろ!？」

「そんぐらい大丈夫だよー。ねえ神ちゃん。」

「なあ。世話役Aはほんつと心配性だなあ。」

『心配性』という言葉に顔を曇らせる世話役A。

「そっそうじゃ・・・あ、そうなんです・・・（神の監視をほったらかしたら失業だからね）とにかく、行くのは許しませんよ。」

「どうせ監視しなきゃとか思ってるんだろ？そんなことなら、ついてきたほうが身のためだぞ。」

「えっ・・・（見抜かれたか。神恐るべし・・・）」

なかなか動こうとしない世話役Aを一瞥して、神はおもちゃの手を取った。そして、殺し文句。

「おもちゃ、今日から私の側近だ。」

そうして神とおもちゃは、人間界に降り立ったのであった・・・。

「ちよっと！待ってくださいよ神！！私も行きますよっ・・・。」

世話役Aの声は誰もいない神のスイートルームに虚しく響いた・・・

o

ブログ（後書き）

小2からの幼なじみ3人組による合作です。
楽しみながら書いているので、楽しんで読んでいただけたら嬉しい
です。

人間界到着！

来てしまった。神とおもちゃはどこにいるのだろうか。旅行と聞いて、絶対仕事放棄に違いない。

だが、私には秘密兵器があるのだ！神をいつでも監視できるようにと先輩がくださった、『神追跡用GPS』！！神のポケットにこっそり忍ばせておいたから、作動するはず・・・。

いつぱう神たちは

「知ってるか。おもちゃ。人間界には『がくえん』とかゆーものがあるんだぞ！！」

「へー神ちゃんものしり」

神は満足気にうなずいて嬉しそうに続ける。

「だろう。だろう。行ってみたいと思わぬか？」

「えーいきたい！いきたい！」

「だが。問題はどこにあるかということだ。」

「神ちゃんも知らないことあるんだ・・・。」

神は機嫌を損ねたのかおもちゃを睨みつけた。

「へー？まあそうゆうこともあるよね」

「まあ、な。けど俺に力を持ってすればお茶の子さいさいだ！！いくぞ、おもちゃ。」

このGPSって結構探索に時間かかるし、そこらへんをブラブラしとこうかな。

「ちょっとどいていただけますか？」

何っ？！この世話役Aさまに何を・・・いけないいけない。ここは人間界。私はただの観光客。素直に聞き入れよう・・・。

「ごめんなさい。邪魔でしたね。」

「いえいえ、いいですよ。あ、そうだ。今、私立上野学園で学園

祭やってるんで、よかつたらお越してくださいね。」

人なつっこい笑みを浮かべながら、チラシを押しつけてくる。・・・

人間は凶暴だなあ。

「分かったわ。お気づかいありがとう。」

もうこの小娘に付き合っている場合ではない！

「おもちゃ。なんだかあそこ騒がしくないか？」

「わぁ〜なんだろう〜」

「ここは近寄るが吉だ！！オレの勘を信じるのだ。」

神はおもちゃの返事も聞かずに走りだした。といっても浮いているのだが。

門の前で立ち止まり、神は一言。

「しりつつえのがくえ・・・がくえんさい？」

学園祭ねえ。暇だし、行ってみるとしよう。

人間界到着！（後書き）

今回は、世話役Aの目線と、神とおもちやを客観的目線を交互にしてみました。

このシリーズは、全般的に世話役Aの目線で書き進めていくつもりです！

私立上野学園学園祭にて。

「しりつうえのがくえ・・・がくえんさい？」

「はあはあ、飛ばさないでよぉ～。いくら高性能アンドロイドでも息切れはするもんなのぉ。」

そんなおもちゃに目もくれず、神は問いかけた。

「なあ、おもちゃ。学園祭ってのは学園がするんだよな。だから学園祭って言うんだよな？」

「って、スルーなの！！ねえスルーなの！？」

「行くぞ。私が察するには、ここは私たちが目指していた『学園』だ！！」

活気に満ち溢れている。いいにおいもするし、学園祭とはいったい何をするイベントなのだろうか。

「おかえりなさいませ、ご主人様。」

ひいつっ！フリフリメイドがうじゃうじゃ・・・おもちゃもフリフリか。

ピピピピピピピピピピ・・・>GPS作動<

おっ！やっとなを探索できる。どれどれ・・・

神の赤点、おもちゃの青点、世話役Aの緑が重なっている

神、ここにいるの！？ラッキーだ私は！！

「ねえ、神ちゃん！あれなーに？ねえってば！」

「あれはだな。食べ物だ。だが、天界の物と違って、腹に溜まるだけだぞ。」

天界の物は腹に溜まるだけではなく、エネルギーチャージも出来る。

「でもいいにおいだよ。食べたい！」

「金持ってないし。私たちは人間をやたら刺激しないように透明になっっているのだぞ？どうやって買うのだ。」

「そんなの神ちゃんにかかれば人間になれるでしょ！はやくはやく！！」

神は顔をしかめると、人気のないところにおもちゃを連れ出した。

「おもちゃ。覚悟。『又アゴア又二口』！！」

「アギヤー！！！！！！」

おもちゃの体は光に包まれ、光が晴れた後には・・・ふんわりとカールしたボブカット少女に変身。世話役Aが嫌いそうな、フリフリワンピースが目立っている。顔立ちは、ぱっちりとした二重。高い鼻。・・・幾分か美人に仕上がっている。

「おし。成功だな。じゃあ。私も。『又アゴア又二口』！！」

おもちゃの体・・・改め、神の体は光に包まれ、光が晴れた後には・・・腰まである黒髪を後ろでポニーテールにしている活発少女に変身。ラフな、ボーダーTシャツと、ブーツカット加工されたジーンズ。顔立ちは、キリっとしたつり目。筋の通った鼻。引き締まった口元。・・・幾分か美人に仕上がっている。

「買ってこい。ついでにさっきお金も作った。」

「かゝみ・・・ここにいたのですね？」

「おう。世話役Aじゃないか。なんだよ、結局来たのか。素直になれよ。一緒に来ればよかったのに。」

勝手に行ったのは誰だこの野郎！！

「とはいえ、おまえは昔から変身が下手だな。ク・・・フツ。なんだよ、その『ダッサイグラサン』は！」

むむむ・・・これに関しては何も言えない。前科が多すぎるので説明は省略だ。

「しょうがないな。そんなグラサン目立つもんなア。くくつ。私がかいにしてやろう。今回だけだぞ？『クロウ又二口』！！」

「アギヤー！！！！！！」

私の体は光に包まれ、光が晴れた後には・・・ひ、ひいいい！！なぜ、こ、こんな清楚な水色ワンピースに・・・（さては神、ワンピース

「スフェチか?!」顔立ちは、奥二重で鼻が高い。それに赤メガネが目立っている。髪は、某ハリウッド女優をうかがわせる、きれいな金髪・・・幾分か美人に仕上がっている。

「神?!金髪はひどいですッ!赤メガネはともかくッ!神のことだから『私はここに入学する』とかなったらどうするつもりですか!」

「ハーフデースとでも言つとけ。」

「雑!!『デース』って何ですかッ!?はあ。・・・てか、おもちゃはどこですか?神。」

「何か食べ物が食べたいとか言つて、去つて行つたぞ。」

「え!?そんなエネルギー不足なんですか!?おもちゃ。」

「やあ。大丈夫だろう。人間界の物は、腹に溜まるだけだしな。」

神が目を向けた方に、楽しそうに??なんだあれは?!球型の茶色い・・・気持ち悪つ。??を食べているおもちゃがいた。おもちゃは大丈夫だな・・・そう思つた瞬間。おもちゃの体が大きく揺れた。関節ごとに、カタカタと音を鳴らして崩れ落ちてゆく・・・。

「・・・ガチャン。おもちゃが人間の前で倒れた。」

神が、ボソツと言いつつ訳するようにつぶやいた。

「あの食べ物に・・・ウイルスが入っていたんだ・・・私のせいじゃない・・・。」

得体のしれない物体が、地面にベチャツと落ちていた。

私立上野学園学園祭にて。（後書き）

こんにちは。今回は世話役Aがあとがきを担当させていただきます。さて、本文中に、「なんじゃこりゃ」と思うようなコトバが出てきませんか？

『又アゴア又ニロ』 『又アゴア又ニワ』 『クロウ又ニロ』。『クロウ又ニロ』と言ったって、『苦勞』からとった訳ではないんですよ。（笑）。

例えば、『又アゴア又ニロ』。訳すと、『ニンゲンニナレ』！なぜなのか？実は、『ニンゲンニナレ』の一字ずつ、次の文字にずらしてみてください。『ニ↓又』 『ン↓ア』。『又アゴア又ニロ』になりますよ。他の2つも試してみてくださいね。

次回は、『せわくろ（世話役Aの苦勞物語）』の誕生秘話をお伝えします！

b y 世話

役A

あの人間の話

おもちゃが倒れた。辺りがどよめいた。当然だ。急に人が倒れて機械音だし・・・って、

「神つつつっ！言ってるじゃあないですか！ゼンマイは毎日巻くように、と！」

「・・・やばいな。・・・よし。ここは流れに乗るぞ。」

ん？神がいきなり立ち上がった。そして・・・

「お？なんだ？あれ人が倒れてんぞ。おい、どうしたんだよ、ちょっとそこのお兄サーン！！」

野次馬になりきりやがった！！『そこのお兄さん』は・・・良かった、聞いていない。

あれ？周りの人間が崩れていく・・・

「はい！生徒会でーす！生徒会室に運び込むので、どなたか手伝ってくださいーい！」

1人の人間が『人間堤防』を力ずくで壊して、おもちゃのそばに担架を置いた。

「おお、好都合じゃないか。ここは便乗作戦だ。おい、私とこいつが手伝う！」

・・・ええい、どうにでもなれえ！

人間と化したおもちゃは、人間のように担架で運ばれ、人間のように応急処置をされた。応急処置といっても、氷の入った袋をおでこにのせ、霧吹きで顔に水をかける（おもちゃ壊れるッ）という非常に簡単すぎるものである。

「・・・・・・・・・・。」

ぜんっぜん喋らない。と思ったら、いきなり振り返って、

「あの・・・もしかして、さっきの観光客の方じゃないですか？」

・・・あっ！さっきの（くわしくは第2話『人間界到着！』をch

eck)押し付けがましい小娘！

「あら、奇遇ですね。き、気になって来てみたんですよ。あの、その子は友達でして、少しばかり身体が弱いんです。もういいので・・・ひきとりますね。」

「えっ、でも・・・」

いらいらいらいらいら・・・いいと言っているんだ！なぜそう世話を焼きたがる？

「お二人さん。おもちゃはなア、ゼンマイ巻くだけでいいんだよ。」
なんと、神が唐突におもちゃの背中のゼンマイを巻き始めた！いきなりにも程が・・・止めようと思った。・・・遅かった。（神は行動がはやい。）

1巻き、2巻き・・・10巻きしたところで、おもちゃの瞳が大きく開かれ、意味深な文字式がめまぐるしく表示される。

《アンドロイドO・M再起動します　ぴiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii

・・・》

カタン、カタン。

「おもちゃ、復活う！もう、神ちゃん、ゼンマイ巻いてつてばあ」

「おお、おもちゃ！会いたかったぞ！すまなかったな、ははは。」

ちよ、ちよつと・・・

「あの、その、えつと・・・」

そりやそうだよな。いきなり人間の背中にゼンマイが現れて、巻いて、《再起動します》だもんな。

「ちよつと・・・神？あの人間の記憶消して下さいよ。」

「はあ？そんな力残ってないし？お前の変身がへた過ぎて、力尽きたわあ。」

・・・神にはいつも、『言い訳の女神』が微笑む。女神様、休暇をとつてもいいんですよ？

「すつすごい、ですね。その、口、ロボット？いいお友達、ですね・・・。」

「あ、ありがとう。ちよつと、父が発明好きでね。」

私は精一杯のごまかしをした・・・が。私に『ごまかしの女神』は微笑んでくれなかったのだ。

「Aちゃん、もう招待明かしちゃおうよ。おもちゃ、ロボット呼ばわりされるのやだ」

「そうだ、世話役A。もうしょうがない。この人間も優しそうだし、他に漏らさないだろう。」

そ、そーだよー！いいよね、この人間くらい。先輩、許してください。

「よし、じゃあここは・・・おもちゃ、お願い。」

「あ、分かった。」

こういう時におもちゃは役に立つのだ。説明がめんどくさい時はね。おもちゃの目が光って、前に映写されるのだ。実に楽だ。

《びろろん》今から、天界講座を上映いたします。携帯の電源をお切りください。盗撮は天界法により、罰せられます。ご了承ください。また、喫煙は館内の奥にあります、喫煙ルームにて・・・》館内で・・・おもちゃ、天界の映画館からパクって来てるな？人間、律儀に携帯の電源を切る。

上映終了。約2時間、私と神は1分ごとにあくびをしていた。

「よく分かりました。あなた達は、天界・・・の神室の人たちで、旅行でここに来た。ということですね？」

「そうゆうこと。いい？誰にも話しちゃだめですよ。」

すると、人間は携帯を取り出し・・・1・1・0・・・おいっ！通報すんなっ！

「おいおい。俺たちのど、こ、が、不審者だ？」

「変なこと言わないでください！ちよ、ちよっと、あっち行ってください！」

はあ。到底信じてもらえないだろう。人間は疑り深い生き物だ・・・。

「神ちゃん、ここは一旦、退散したほうがいいよ。警察なんてや

だ。」

「そうだな、おもちゃ。かわいいおもちゃを研究所でバラバラにされたくないからな。」

おもちゃの顔が、一瞬引きつった。神、言い過ぎだ。

うん。退散退散。

「神、もう帰りましょう、天界に。人間界の空気は濁ってますし。」

「おもちゃも・・・バラバラやだあ。」

私たちは、??黄色と黒の縄が張ってあったが、気にしない。あんなの容易に通れるのに。??学園の隅っこの、長い耳がついたフワフワがたくさんいる所の前で話し合い。神は一瞬考えたあと、

「いいや、あの人間の誤解を晴らすべく、学園に入学だ!!」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

これは長い旅行、いや、長い仕事放棄になりそうだ。

あの人間の話（後書き）

「世話役Aの苦勞物語」第4話「あの人間の話」をお読みいただきありがとうございます。今回の後書き担当は、神だ。世話役Aから『誕生話を』と念を押されているので…言い出したのは、私。神だ。今のこの楽しい日々を、小説という形で記録しなかったから。以上。

…これ、世話役Aから苦情が来そうだな…。

b y 神

世話役A 苦勞する

にゅ、入学・・・

「神、無理なことと言わないでください・・・もう私、疲れました。し・か・も！住民票ナシ、名前ナシ。第一、私たちは人間界に生まれても死んでもないんですよ?!」

「そおだよ、神ちゃん！おもちゃもフカフカベッドでお休みしたいよお。」

「おもちゃ、おまえは何もなくていいぞ。おまえはデリケートだもんな。」

おもちゃがごくごくと首を縦に振る。じゃあ、誰が・・・はっ!! 神は私の方を見た。嫌な予感。

「世話役A。おまえは『世話役』だよな。だったら、なーんでもしてくれるよなっ! なっ!」

ということ、私は働かされることに。やることはたんまり。

1 出生届の作成(いい名前を作る。プレッシャー・・・)

2 家探し

3 入学手続き

なんでも、人間界は魔力が弱い。神でさえヘトヘトになるのだから。神とおもちゃは、長期滞在することになる高級ホテルで休んでいる。ああ、早く今日が終わらないかなあ・・・

まず、出生届。外見は大人なのに、「生まれました」とか言ったらもの凄く不自然である。このくらいだったら疲れないので、魔法を使う。しかも、名前は、さらっと出てきた。

「神宮 はるみ」「王元 ゆい」「世話野 みかん」(今日学園祭で食べたみかんがおいしくってさ)

完璧。

一方、神とおもちゃは。

「おい。おもちゃ。大丈夫か？」

おもちゃからの返事はない。当たり前だ。寝ているのだから。精巧なアンドロイドは寝るのだ。

神はため息をついた。神は、眠る必要がない。寝てる間に何かあったら、取り返しがつかないではないか。・・・という理由で、眠る機能がなくなった。神は、ダルそうに専用の機械を持ち出した。

「世話役Aが・・・サボりだサボりだつてうるさいからな・・・。」
ウィイイイン

その機械は、静かに・・・起動した。

次は家だ。重要なポイント。神もおもちゃも、「ボロかったら承知しねえぞ、コラア！」と言っていた。(こんな風には言っていない)不動産屋へGO!

「いらつしゃいませ。こういった物件がよろしいですか？」

「そうですねえ。お金は惜しみませんので、この辺の一番良いものを。庭付きね。」

「かしこまりました。えー、そうですねえ。こちらはいかがですか？」

店員が見せたのは、100坪程度の庭付きの新築。白いコンクリの壁に、3階建て。ちよつと狭いが、人間界であれば上等だろう。

「では、願いますね。」

「ありがとうございます。お支払いはどうなしますか？」

「ああ、もちろん現金・・・」

わ、忘れてた・・・今手持ちにある金は150万円。この物件の金額は・・・

3500万円!? あれえ・・・天界では魔法で造っちゃうし、土地もたっぷりだからタダに近い金額なのに。
どうしよう。足りない。

「お客様・・・外国の方ですか？」

「え？はい・・・」

外国人になりきつとけばなんとかなるかな。

「我が日本には、ローンというものがありまして・・・」

店員は「ローン」の魅力についてえんえんと語った。ローン・・・一応組んでおこう。

一件落着。住居問題も解決だ。

一方の神とおもちゃは、・・・と言っても、おもちゃは寝ているのだが。

神は、機械を素早く操作した。この機会の操作方法は、神族しか知らない。・・・だから代役が探しづらかったりするのだ。その結果、世話役Aがブックサ言うことになるのだが。

神は、その機械を上野市周辺に合わせた。そこに書いてあったのは、明らかに神が書いてない言葉が。

《神・victoire、aimable protection、アンドロイドO・Mに会う》と淡々と書き加えられていた。

「くそ・・・やっぱりこうなるのか・・・」あ。神は、おもちゃを起こさないように、そつと機械を動かし続けた。

最後は、学園に入学手続き。

「えつと、この学園に入学したいんですけど。」

私立上野学園（略して「うえがく」というらしい）の事務室に行けばいいという神からの唯一の伝言だ。

「あれ？保護者の方は？」

「実は・・・この前亡くなって、親戚の家に来てるんです。」

「まあ、お気の毒に・・・」

ハッハッハッ！親なんて最初からいませんよーだ。考えてたのさッ！「じゃあ、前はどこの中学校で？この辺り？」

「福岡県の〇設中学校です。」

「まあ！名門じゃない。」

ハッハッハッ！中学なんて行くかッ！名門校くらい調べたよ！

「では、入学手続きをしますね。」

「親戚の子供と、里子も入学したいです。みんな中2です。」

「えッ。みんなその○設中？」

「はい。証明証あります。」

ハッハッハッ！簡単に作れるのさ！まんまと騙されてる、この人間！

「では、また明日来てください。証明証はお預かりしておきますね。」

「

よし。終わった。また明日来れば、12月はゆっくり過ごせるな。

一方神とおもちゃは・・・と言っても（以下略）

神は上野市周辺で、ある人間を探していた。その『人間』の所にくると、神はおもちゃが寝ているかどうか確かめ、ゆっくりと書き加えていった。

《神・victoire、aimable protezione、
アンドロイドO・Mと親しくなる。》

そして、伝言板らしきところに、《代役へ、この文句は消さないように願う》と書き加えた。

ウィン・・・。神はその機械の電源を静かに切った。

世話役A 苦勞する（後書き）

やつほゝ！！おもちゃだよ。今回は名前のことについて話すよん！

ちなみにAちゃんが作った人間名と天界での本名の二種類があるの。人間名のは感じでわかるかもだけど、いろいろもじってるよ！！（わかる人はわかるよ）。んで、天界名なんだけど、神ちゃんは『ヴィクトワール』で世話役Aは『プロテツツイオーネ』って読むの。え！？意味？・・・。そ、そんなのおもちゃわかんない。

b yおもちゃ

オマケ（前書き）

この話は、幼き頃の神と、世話役Aの出会いの物語である。

オマケ

「あんだんだんと!!」

「なんですか？ victo^{ヴィクトワール}oire様。」

アンタンドアント（intendant）は幼き頃の神（vict^{ヴィクトワール}oire）の執事である。

「おもちゃがこわれた!!」

「すぐにゼンマイを巻きますね。」

アンタンドアントは、神の目線に合わせるとおもちゃのゼンマイを巻き始めた。

キリキリキリ……。

《アンドロイドO・M再起動します　　ぴiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii

……》

カタン、カタン。

「おお!!すごいなっ!!あんだんだんと!!」

「いえ……。」

アンタンドアントは目を伏せて、言いづらそうに切り出した。

「実は……私、今日限りでここを辞めさして頂くことになりました。」

「なんでだよ!?!」

「ヴィクトワール様。さようなら……。」

シュンツ……。

アンタンドアントはそう言い残すと消えてしまった……。

「あんだんだんとオ!!」

神の悲痛な叫びは、神のスイートルームにむなしく響いたのであった……。

神は後日知ることになったのだ……。

なぜアンタンドアントがいなくなったのか……その理由を……。

次の日。

神は一通の手紙を部屋の中で見つけた。そこには、アンタンドントがいなくなった理由がつけられていた。

《intendantへ

長い間、あなたにはお世話になったわね。

主人と話し合った結果、貴方とO・Mにしか心を開かないvic
oireのために、同じ年頃の子に世話をしてもらった方がいい
と思うの。だから、あの子の執事を今月限りでやめてほしいの。

このことはあの子には言わないでちょうだい。

La dees
se de la raison より》

読み終わって顔をあげると、そこには自分と同じぐらいの年の子と
お母さんが立っていた。

「ヴィクトワール。この子が新しくあなたの世話をしてくれる、
a
エマエマール
ブル
imable protectioneよ。なかよくしなさいよ。」

「はい・・・おかあさま。」

素直に答えた神の目には、母親への、憎悪が浮かんでいた。その感
情に全く気づかないお母さんは、満足そうに微笑んで、部屋を後に
した。

後に残されたエマールは、恥ずかしそうに話しかけた。

「あの、ヴィクトワールちゃんだよね？よろしく・・・。」

「ああ。よろしくな。」

ヴィクトワールは、手紙の内容を思い出してか、虚ろな返事をした。
「うん。よろしく。エマール・プロテツィオーネって言うんだ。」

「ああ。しってる。」

自分にかまってほしくないというように、ヴィクトワールは邪険な
顔をした。

「覚えにくいだろっから、エマって呼んでね。」

「エマ？あ、そうだ。おまえ、aからはじまるつづりだよな？」

「うん。読みはエだけどね。」

ヴィクトワールは考えこむと、嬉しそうに、喋った。

「じゃあ、おまえは、せわやくAってよんでいいか？」

びつくりして、おろおろするエマーブルをよそに、ヴィクトワールは呟いた。

「あんたんだんでは、つづりはiだったが、よみは『ア』だった・・・。」

かのようにして、世話役Aと呼ばれるようになり、2人の出会いは幕を閉じたのであった。

「神！なにボーっとしてるんですか？」

目を開いた先には、厳しい口調でしかる世話役Aの姿があった。

フツと口だけで笑うと、怪訝な顔をされたので

「いや、なんでもない・・・。」

と、笑いを押し殺して言った。

「・・・そんなことより、朝食が冷めますよ。ちゃっちやと食べちゃってください。」

そう言つて王宮料理を口に詰め込む世話役Aの姿を見つめて、聞こえないように呟いた。

「わかったよ、エマ。」

オマケ（後書き）

こんにちは。短いショートストーリー。いかがでしたか？
書くことに詰まったときは、たまにこんなことしますよ。

今回のオマケには、意味の分からない外国語が出てきますが・・・
ちゃんとして調べてるんです。

例えば、Deesse de victoire デエス・ドウ・
ヴィクトワールというのは、フランス語で女神という意味。この「
victoire」をとってつけたのです。

世話役Aはaimable protezione。protezioneは、フランス語で『守護』。aimableは・・・調べて！（めんどいw）

by世話役A

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8527x/>

世話役Aの苦勞物語

2011年11月12日12時10分発行